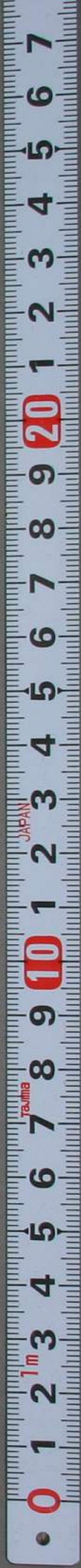


夕張日誌
全

ル 4
4747



4747

東西蝦夷山川
地理取調紀行

夕張日誌

多氣志樓藏板



一 ユフバリ 去箱館百餘里 石狩十ニヶ場所 トクビタ 上サツポロ 下サツポロ
上ツイシカ 下ツイシカ
 上カバタ 下カバタ シユマツプ の内ノ多ク下ニテ ハツレヤフ 不_レふを地エツブトの
 上ユフバリ 下ユフバリ レノ早イホウ
 左の源_ニて西南をユフツサル_ル境_ニ西_ニハ_シ長_クは_ハポルムイビ
 バイソラチの水_源は_接東_ニは_十勝_ノサツナイ岳_ニ隣_ニ是_地
 妻_地弟_ニの大_岳安_定四_年己_丑年_七月_其川_筋より_レコツ川_ニ至_リ
 歳_今余_カの_後新_道見_立の_為に_境域_ヲ交_換ユ_フバ_リ誌_ニを
 を_著夫_レより_レコツ湖_ニ上_リ度_クラ_サク_マナ_イと_シ海_濱タル_マイ_濱
 是_レ新_道見_立の_為に_壱舞_岳の_東西_ニ通_ル是_レを_著レ_{コツ}誌
 一_卷を_著共_ニ地_圖等_ヲ画_シ函_館府_ニ納_メ今_ニ四_卷を

夕張日誌

今七巻を括り一巻として此を及是迄極美人及び己酉年終りも辨へり
考す極よけへ来れども然らざる事す天地開闢人倫の起る事を得
へあり申す

皇國太古の自振山地に残る事審記して夕張日誌と名つす
されど此一巻を風土記の新なる開闢の考を大抵を以てし
るし志士を著りし事関西人の考めは原稿を熟讀して
著述元廟申中をお下谷新屋敷橋合源弘より

丁夕張日誌

伊勢 松浦竹四郎 著

石狩の之小屋に歸り及多の美人を来りて支配人（初め）を以て
種痘を施す柳此地穿一の災厄を免れ痘瘡を人曰是を減損と
す亦いひは法村垣若深く是を憐れむ人多くの醫治をせり
釧路の隈にも亦く此方を施すや此火厄を除きむ人となり

今夕張の之小屋に神國人は此を以てしるし
此中夕張の之小屋をヤリカニウアキイト
八日艦堂公長在川氏（儀）酒二樽（二斗）を納む衣着津石持遊（廿七日）

九月重務四塞散舟一エツフト中冊よりあるエツトと免石のやくニツは分り
 処に依てまづ年々此を苦む人あり余新ありて及り燈見今も西界
 遊後翁翁樹也又目を翳ふるや一警先能去て啼鳥也昔時異形り
 椿象も色黒利嘴較し倍と嘴刺あり志り以りカモイウツカチヤイベ右
 カクキヌカヤ
 チレ子ノタフチレの流線形と一は流あり上は流ら其出於若葉等より樹と折
 葉あり心守と標表揚かつり利柄も不補擬梳紫葡萄の氷纏結もカモ
 イウライウレ急流ハシケソウバ左ヘシケソウバ左ホシカヤニカル左カヤニカル左トフ
 シホヲマナイ右レユブンベツ右マワレノカツトコン右チエトイトレユシナイ右此迄
 新多りヘタヌ左レコツ 此又ユフバリは水も白く濁り
 左リコウ上余ラウントウ右周園右周り若多く芝実蒼葉茶葉蕁葉等
一ノカニナサノメ

又流末多く横たまり河の濁りの節あり舟通の難此より二里許にタシ
 子トウ中トウ下長一余 是も若葉多し花沼振成りて度裏に新しをまよりク子トウ
 河是も上流に花沼に水濁りて極多し若くニハシヤイウレナイ右バシケヌカ地ヘ
 シケヌカ地アヲタフ右クツタラ左古村左家も若人里とて定設度とて五十六新
 有り多し今も一形なり是よりノヤサロウレ地アチヤン左ウエシ左川
 此河の支流も小く多し源ホルムイと向背して少くのみ有
 家を造てクツタラ右此を地味も重なるも水も濁り極多し細流あり是を
 上ユフバリと云はれ是上をユフバリと云ふ人同し辰未此も若くは時葉内
 の若葉を解し濁り極多し上下未だいりと言はれ余此等々タウコフより舟を
 コフ造りて後、是をビラケレヨマ右テ子ナイ右トイビラ平ホシビラ平ホロビラ
祀す

昔よ山の下の平までユフニ川カ

此川が二の支流より多く流はユウニホリと云山多ツカベツと向背と
此より概山が川に遊と急流は身を越てアノ口左の方
中なる 宇地人あぬあり

此川が二の支流より多く流はホルムイの原と云ユフハリの山より下り

よてワソヲマナイ事してタツコフは水をマライより越すと有りお昔より上も取目を
愛は後つくべ

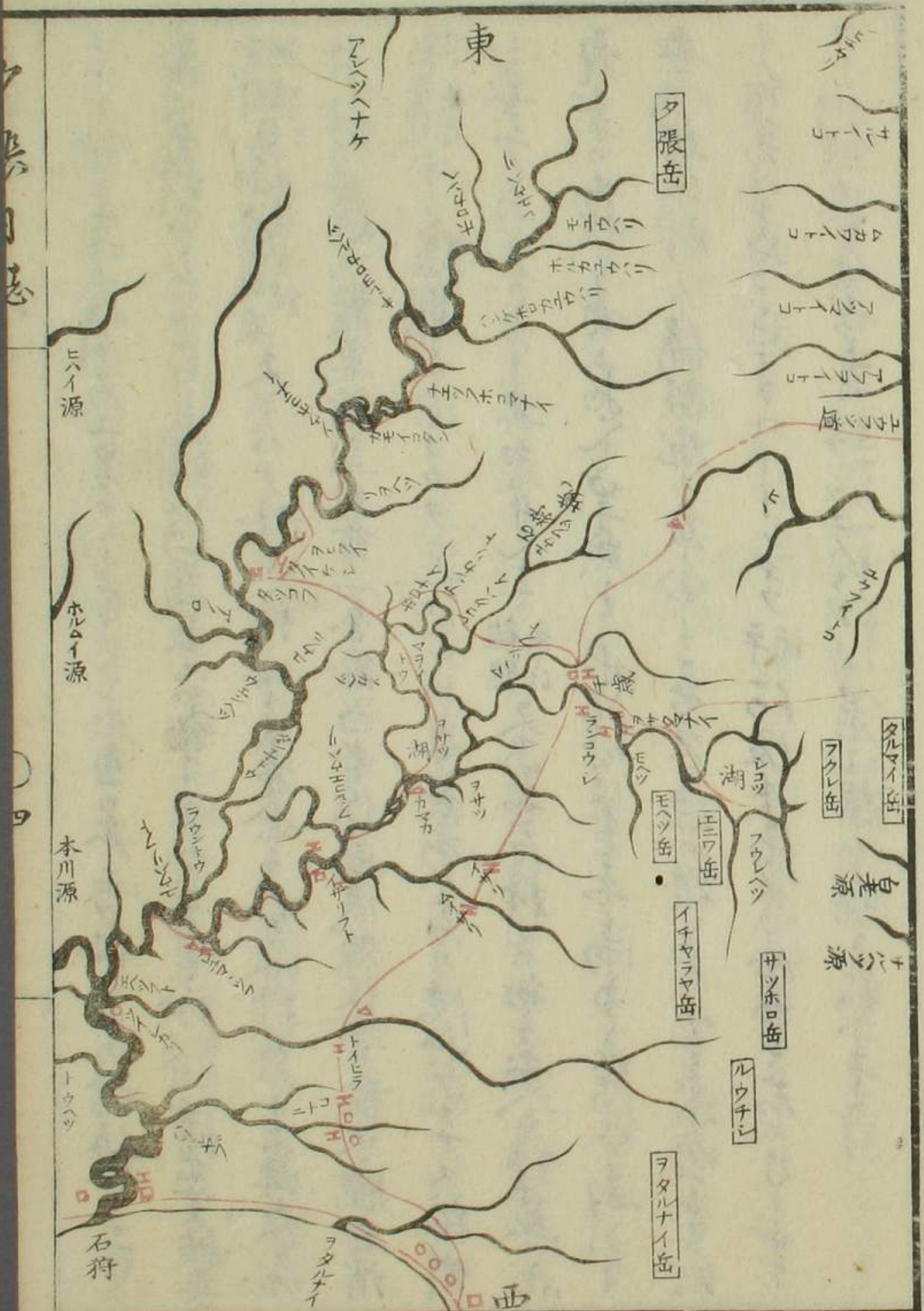
相二夜月へタヌニ役もたふ入り斗レニマツフ川中
吾君小休おははる
宿あり 宿ありお人

新イワク 有愛の地まると人あぬありとナニ橋おのりなり

春名レユマヲマフとて岩ありと云義あり流を宗親長と云る有る小なる多

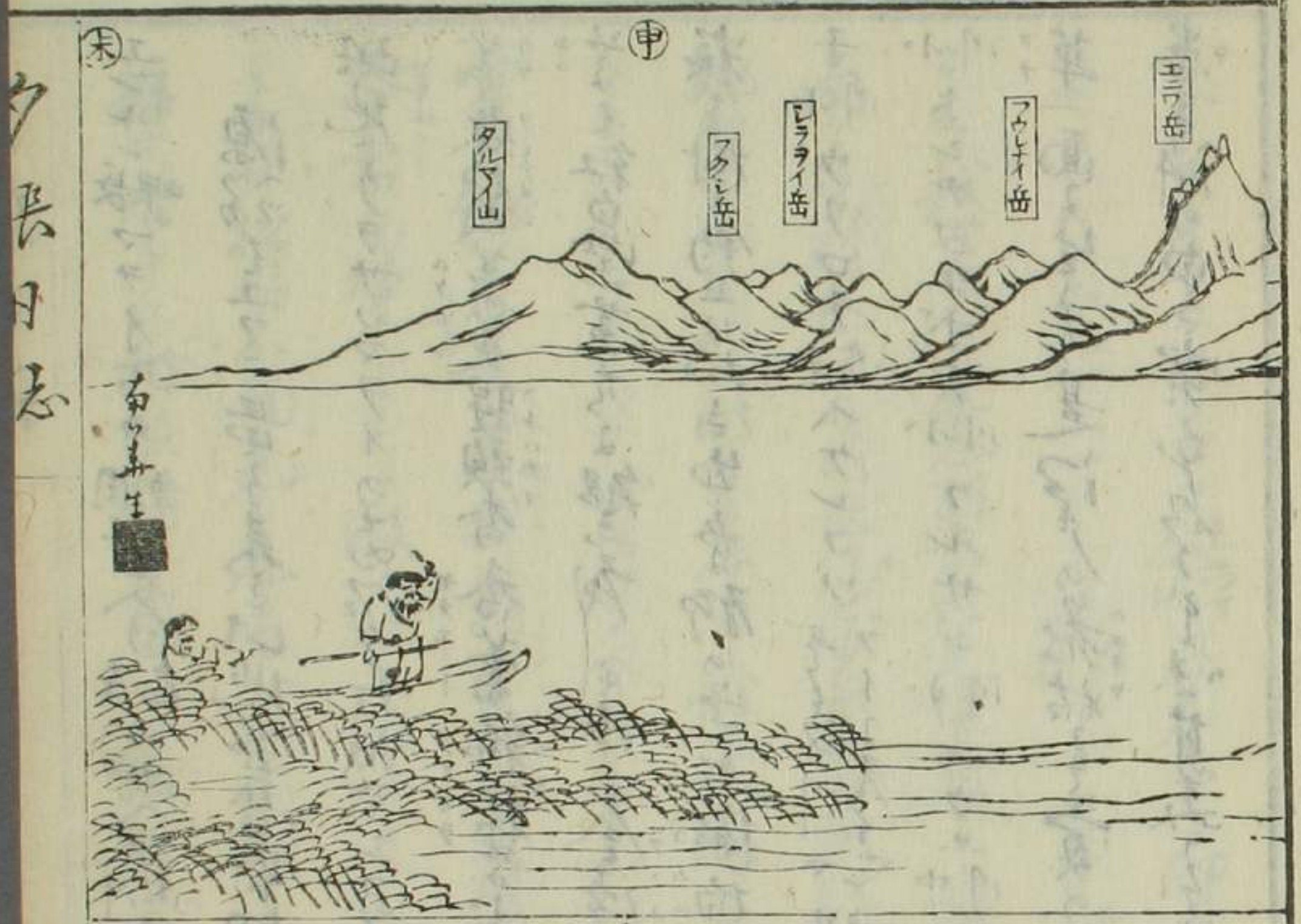
標石符 有ると有る地多水と繋ぎキナチヤウレ川ホロヒリ地
ウレロヲ

レウレ川ホロヒリ川は上より用一室はロコンと云針らる真あり此沼の上口コモ





宍戸の公歎亦も賤くも此の川
弘此の葦圃樹餘を園をよ羽お秋田
城外有河其源滿注於山谷故其水
則淡其中産一奇魚殆如鞋底魚
大都五六寸較比目大同唯鬣尾小異
味亦似比目而美土人呼曰鷹羽比目
節くは是かう此魚エハツトより本川
節く一魚をもんるや行 右後以乃
の産をもも亦あし



十月の平の波をちこのの谷秋のるう程
の影を登るるのま我もも数度
カリンバフト川に出るヤサツトウ沼
沼周の川人源イチヤラのわらう
外は村も福平通りなり
南シヨツクニクバイ字は夏屋入とて
マライ沼ヨ此る字をわらう向う小
舟は舟の船を揺る揺るを思ひか
老の川の波の足も思ひか
南のヨアガリト沼ニ上はウエノ夕岬タン子

エシルン岬マナイトウヨヨ入リ左ツカベツ川を至冷水平崖まで引上陸

源ハツカエフニ岳より来り此地室厩は畑多し有る麻多し荒らさる

此地よりヲサツマフイの山を打越してシコツ家宿山を臨み頗る佳境なり芒青

茅敷也蘭芝蔓脚頭香香葛籬籬等小連翹麝香草龍膽蔓龍膽等珠釣船

草も紅白紫黄赤も解る所中へ金鐘児翁續娘老木嘴子等がより夏は海苔の

根を樹釣上げおき出さる柳のさね榭柏魚の中よりくくホロナイ川小レフント

子川ウリロチ川ヘケレコツ此川は川マ此川は川マ此川は川マ此川は川マ

小ホシナヨケボチ川小フルサン川小エウニ川中より途中華錦花を多く見たり又古子

草一面は生より是は江戸の花姑を賣るけり其尺さりけり此地は古くは無

患子許の白く実るけり其味甘美し葡萄の如く土人は是を干焙り糧と

まいてまいてカタムサラ谷地の芝系を押し以て頭を築れば良方より南をみて

ハチヤンベツ岳ハホルムイ岳アノ口岳ヲヒフイ岳同ソラチ岳山勢連亘極

多し越え遠く至志別岳は是皆然し時季はエスハリ役競肩摩天許

南に築別岳板井岳沙爾岳元敏駢列して地蔵の禎山襟帯の方より連

続望えん乃折し山を麻多し畑も味子を教せるなりヤエタルコロ頭の熟を村

よりしてニタツヘツ川へルウヘツ川にてタツコフ控ヤムワツカなるコトラン人の家

宿を傍に眉豆栗稗餅粟小豆蘿蔔芋芋白胡瓜南瓜等々他より又傍

香葉を植りて是は飯を炊き湯に入香をよめ春を考ふ極むる此あり時

五針松炬石楠花を入り中し相の家は此地の一博識して故事を多く

辨へ居ると相顔頗る威り緑鬘黄髻胸を掩りて年歌を問ふ八十歳

素より六十八丈と云ふ遊事、主人の歳をたゞる者、一能く知事と云ふ、いそれを
 濱邊の者より我を、何と己の歳をたゞる者、一能く知事と云ふ、いそれを
 振内地とは思ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 吉山、刻出、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 分月の大小、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 乃歎の元、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 宵の連、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを

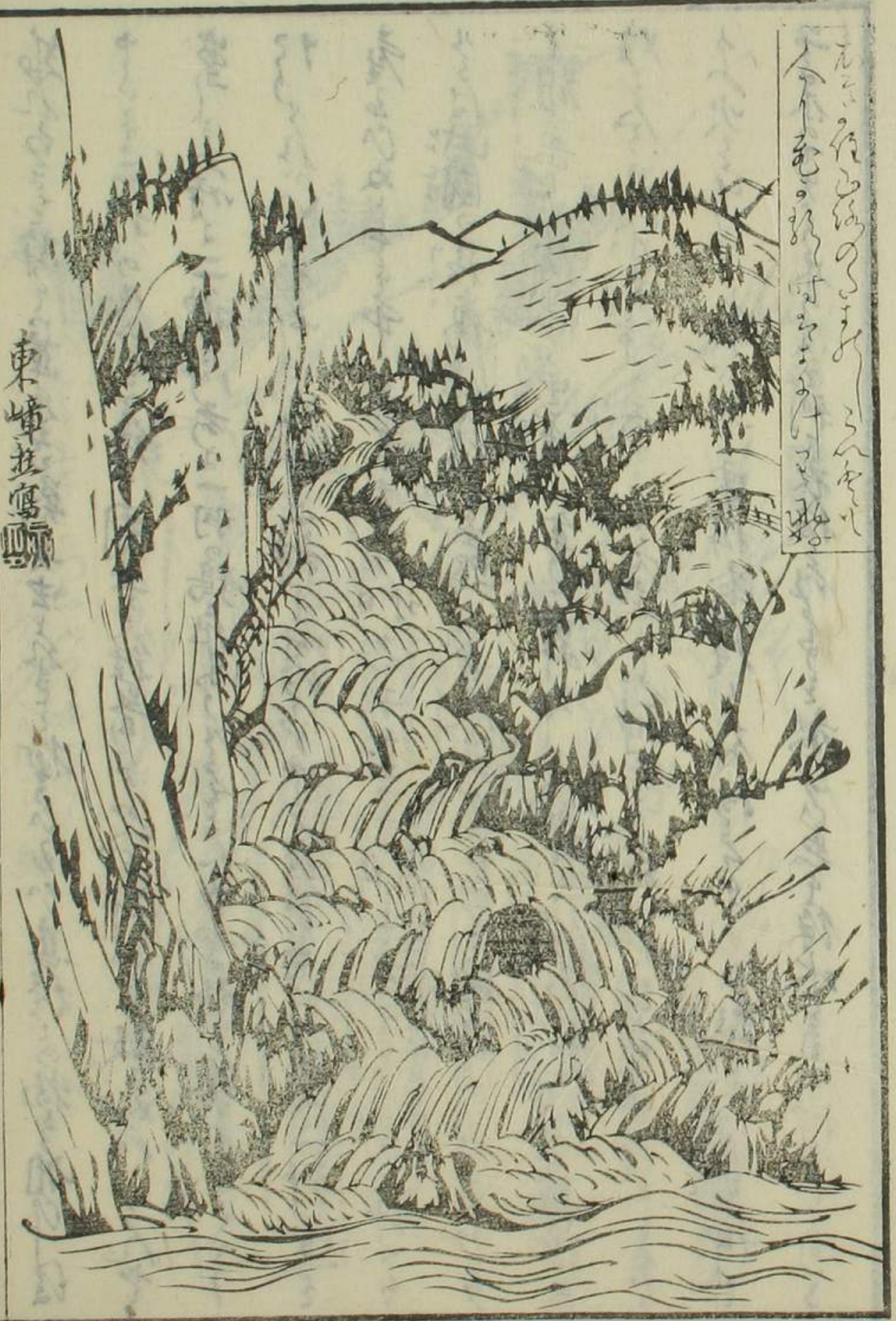
正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
 其義、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 神、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを

下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉、萬葉集、天地之神、乞禱、
 乃美、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 虫和名、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 叩地也、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを

月、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 朔日、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 晦日、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 今、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを
 上、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを、一能く知事と云ふ、いそれを

此等と熱する所傳りり人の減るに随て風俗も次第に衰えりしを惜む
 べく余誠は林の彼岸を問ひて八月二日言津訶の果してその如く
 には感後の餘りも傍に或る事ありし也

花鳥は福も月日を去れりしを神代やうしのたふかしのめ
 庭に熊籠鴉を飼ふる物の籠前よりホを多くして其の由來は昔古
 未の園土を物に耐ら海原の中を浮油の如き物有るは燃多の如くたふ
 といふあり湯も物に凝る根をたふし鳥根月日を重たし堅なり又
 凝て一粒の神ありやうのたふかしのめ天のまゝに
 凝て一粒の神あり五粒のまゝ次第にたふさるを海に投入せし水
 解とせしむる黄りしを以ては白根の根を埋めし時を金銀珠玉巻成



東嶺並雲

長日志

〇七

復次實檢其地理宜拓荒耘廢授播穀種菜養蠶之法以備凶荒宜令其種民無餓無凍

復次山岳河海其中所有金銀瑠璃瑪瑙璉琰黑珠琅玕禽獸蟲魚蝦介草樹森羅萬象有性無性恒河沙數百千萬億一切諸物皆宜採之令此世界衆生得圓滿善利大

富豐饒

復次所任此國土如奸吏奸商番人等非人者宜急放逐置清潔廉直之大吏及諸有司令正賞罰重典

復次所在部落宜籌計年々生死繁息善男子善女人令之請習武枝警戒不虞今余所付囑无上甚深微妙最勝

之真理自合天地造化生々之道所謂神儒佛三教亦蘊在其中汝等宜信受奉行即時破天荒講遺利解脫窮乏困厄之苦得即成安樂國土

爾時斯國土一切衆生阿為奴羅女能姑羅世迦智羅迦奈智羅等皆俱發一大音聲歡喜恭敬禮拜宜乃出真實

言其言曰

唵梵音歸命義保魯備引夷言廣伊邊哆耶引夷言保魯備

引夷言廣伊久吃耶引夷言宇增無計悉引夷言唵

嚩囉薩引夷言唵引夷言娑吽乃引夷言耶

阿羅為計引夷言娑嚩訶引梵音成

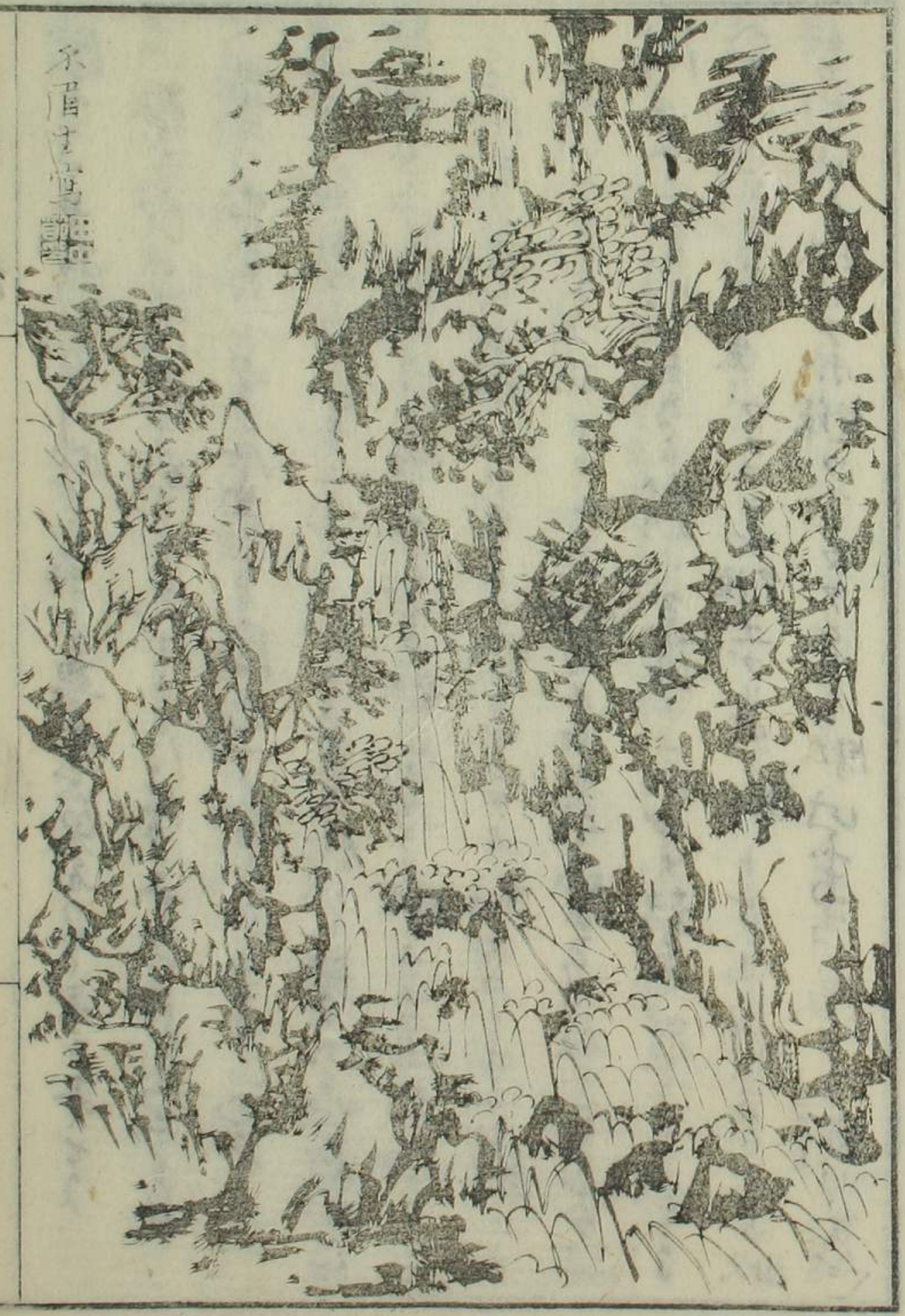
と云代料様あり是は切藩士は御も関係と云うはくは友人と御
あるは政度上なりはるは復順あり時々は時成ると一子ありは
扱ておのははは令の法とて延式内務司大務職の法は異なりはりは
古風ありはりはりは

十九日早く馬と出立此地の馬を皆と表として其訓易き事實は土人の
質朴馴るる人にて陰森なる木の影と葉は自由なるは悦曲馬の馬の
如く妙とてヒルレハツタリ 大トヘロマイ 坂を越てランコウシ 岸は人か
又カレウク シタク 又カレウク 子供十人あるを 一回は并せて 余は人か
又エサン イヘニセ 乙名 又カレウク モシコラシ イタクトキ コスカ 安と余は 高班杖 根天
過てカマバ が ベサ 川人 お 五 新 カンナウク キテサン ヘシタ イハチ
南星を 取 丸 樽 是 は 土 人 の 草 草 と 云 は は 頗 る 美 味 と は 是

と云人 と 毒 なり と 味 さ 由 と 怪 し 心 の 望 と お は は 味 を の 毒 あり
教 一 故 余 七 ハ ッ を 考 合 ま す 一 は 何 の 障 り も あり と 有 毒 草 木 園 中 に
収 め る は 心 毒 なり と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
た ま し は 毒 を 殺 す と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
毒 を 殺 す と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
當 大 我 と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
ツ コ ツ ト は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
亦 シ 新 レ テ 又 レ ル イ ハ 諸 侯 と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
て わ の 角 と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と
頗 無 あり と 云 は 未 だ 検 察 せ り と 毒 を 心 の と

カ
○
二二

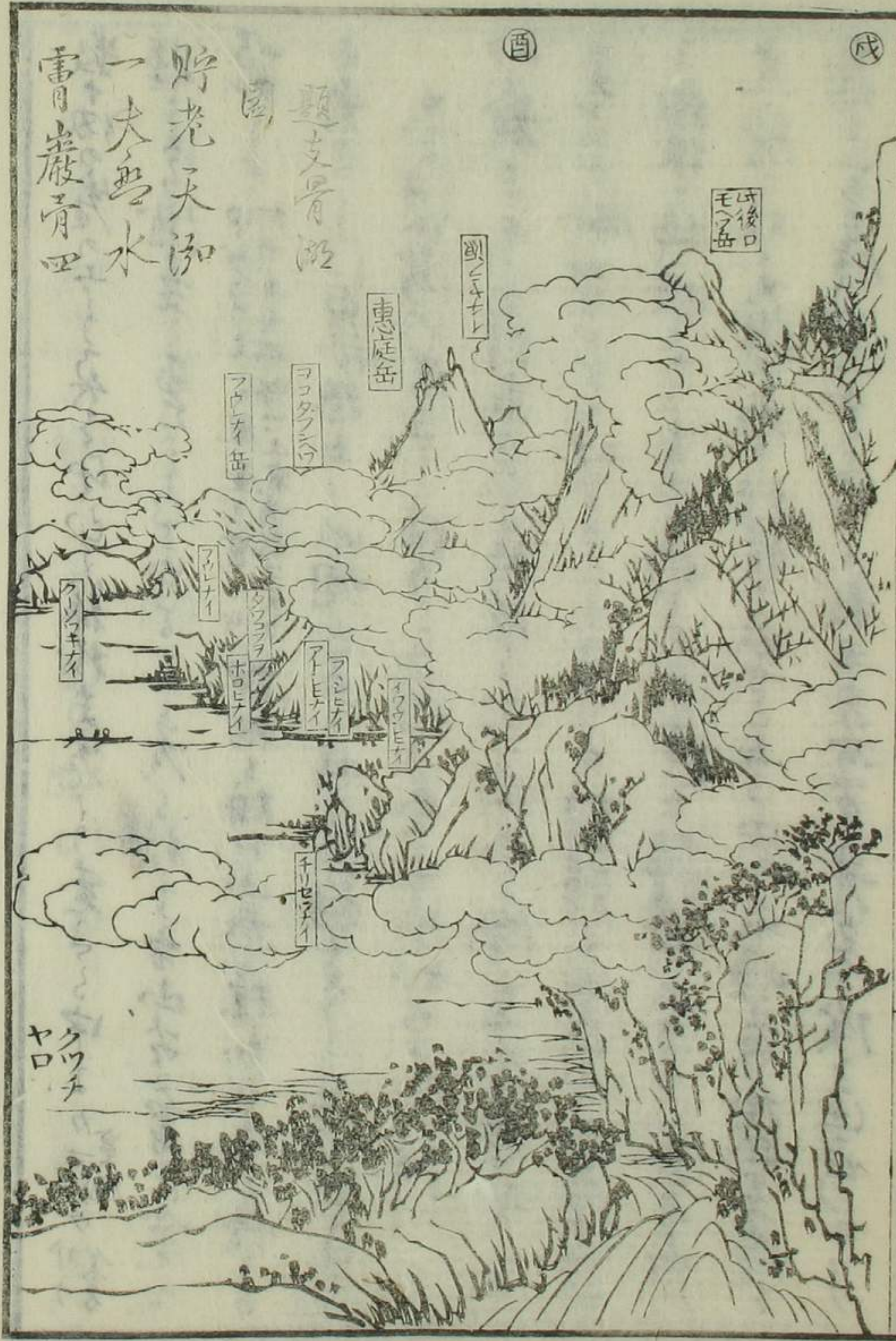
山ノ腰ヲサクマナイ 山ノ腰ヲサクマナイ 嶽ノ中ニ山ノ腰ニ唯樹根を露枝を垂人亦五折 サエ
モシユアレキサフホロ 家右ノ具ノ末ニ子イシテ多ク富ニ想テ此道ノ末ニ折クノシ
ユトを思フ ケフライレト アカシレト 申ノモアカシレトニ取ラ異粒ニ并セ
 ンヤノ見方一嚴派ノ者ニテハ心付ルニ深小ニ他ニ古ノ猫頭刺 ヒイラキ
 用ひたり仍てヒラキを考メレトニ由レトト他ニ木かれニ考メ
 用ひレラキノ根モヒラヒラキノ畧クヒラヒラノ利ト故ニ号け始メテ柳ノ木
 之ノ人ニ折棒ニ他ノ事ハ大古ノノ故ニ号メテ古ノ記ニ杜若樹ハ草ノ
 之ノ文ハ茂葉ノ時檢此連段ノ下部ニ杜若樹ハ草ノ記ニ杜若樹ハ草ノ
 此ノ下ノ事ハ古ノ記ニ連段ノ事ハ古ノ記ニ
 女日遊多ははる舟小舟也即人亦ありてモツグト 此人亦ありて 是より上ニ



水窟山

支那の地

三



戌

酉

貯老天流
一大無水
雷巖骨四

支骨湖

毛後口

惠庭岳

凱ノミナト

フコクノ山

フコクノ岳

フコクノ山

フコクノ山

フコクノ山

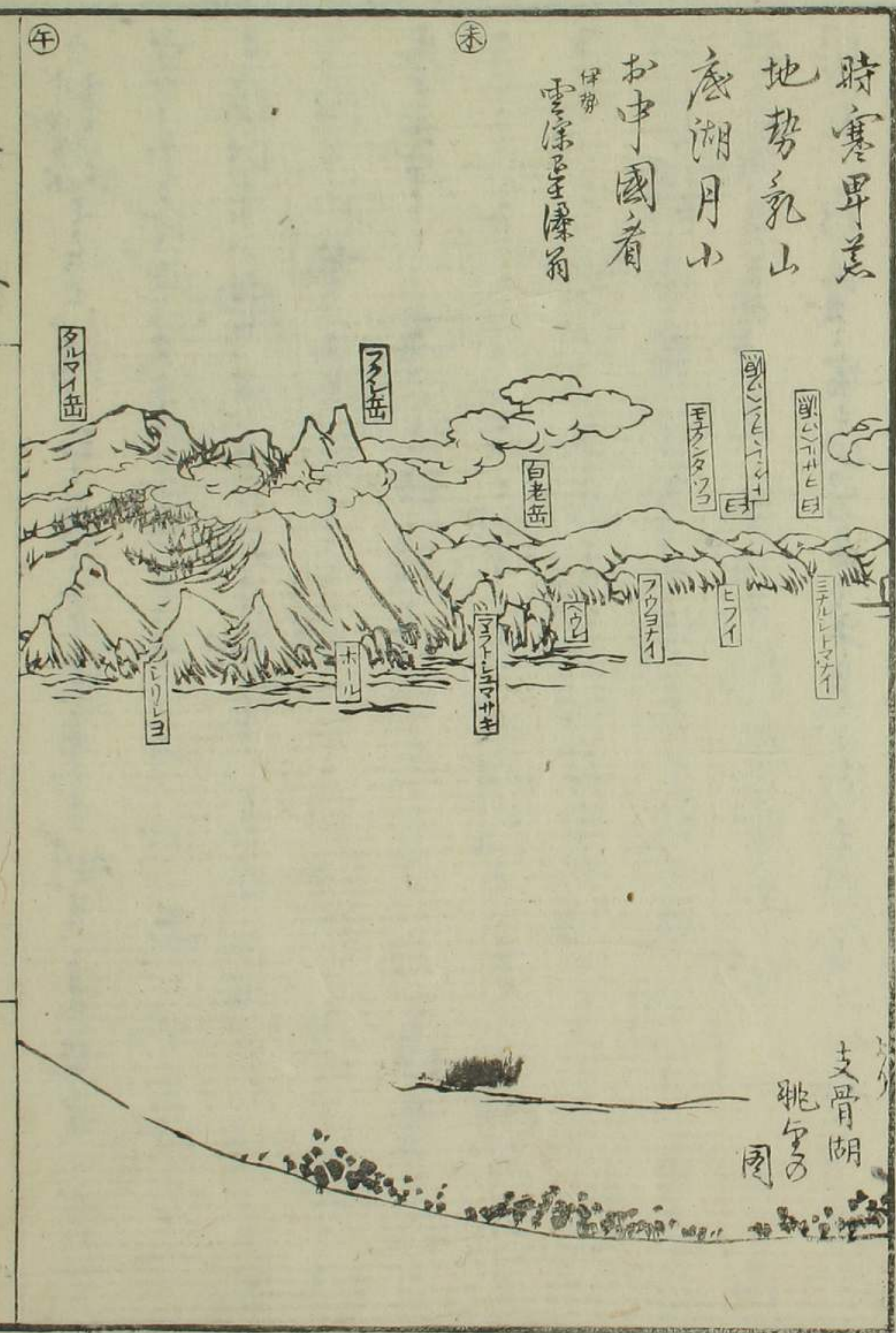
千世ノ山

ヤクウチ

時寒早流
地勢乳山
底湖月小

お中ノ國者

雪深星瀑翁



未

午

支骨湖
眺々
園

タルマイ岳

フコクノ岳

凱ノミナト

フコクノ山

白老岳

フコクノ山

フコクノ山

フコクノ山

フコクノ山

フコクノ山

外傳 福 函

いづれ國ありをまの祈りたる家あり
かきつゝかきつゝかきつゝかきつゝ
わさささの是に...
いささかふ流 柳の夕張日福の身...
鳴川... 海...
は...
尾河喜村

松井西登書

